1959-1965

こわかった佃先生!?
その教訓は今も生きている

写真左から、向林・辻・宇川・（故）ヒルケルさん・佃先生・山村・三宅・（故）竹岡［1964年撮影］

22期は総勢６名（宇川、竹岡、辻、三宅、向林、山村）であったが、それぞれが個性的な連中の集まりであったと思う。現在は東京、名古屋、神戸とバラバラになっているため、宇川、辻が原稿を作成し、三宅が編集するという形を取った。この紙面を借りて向林、山村両君に失礼の謝意を表するとともに、亡くなったヒルケルさんと竹岡君のご冥福を心からお祈りしたい。

こわかった佃先生

我々同期６名が憧れの六甲中学校に入学し、伝統あるサッカー部に入部したのは昭和34年４月。時を同じくして１人の六甲ＯＢの新人体育教師が着任されました。その人こそが我が六甲サッカー部育ての親「佃先生」であり、我々には衝撃的な出会いでありました。

優しく温厚な反面、その厳格さは当時学校内でも評判でした。というより一口で言ってとても怖い存在でした。一つのエピソードを紹介しますと、公式試合が近づき我々の練習に熱が入っていないときには、先生の怒りは頂点に達し、石が飛んでくるわ、足げりはあるわ…という事がしばしばありました。という訳で、先生の厳しさにサッカー部を辞めたいと思った人がかなり多かったのではないでしょうか…?!

しかし、我々６名が卒業するまでサッカー部に在籍でき、素晴らしい想い出を残せたのは、「お前たちを昭和39年の新潟国体へ必ず連れていってやる」という佃先生のロマンとサッカーに対する情熱に魅かれたからだと思っています。

40代半ばを迎えた我々にとって、このロマンと情熱の重要性を改めて痛感される今日このごろであります。

さらに、中１時代第３グラウンドの石拾いに明け暮れた部活動、春・夏合宿での厳しい練習、初めて神戸市の大会で優勝し全校生の前で武宮校長より表彰された嬉しい想い出などが走馬燈のごとく思い出されます。

これらはすべて、怖くて優しかった佃先生および先輩諸氏の良き指導と後輩諸氏の協力に依るものであり、改めて厚くお礼申し上げます。［辻　禮治］

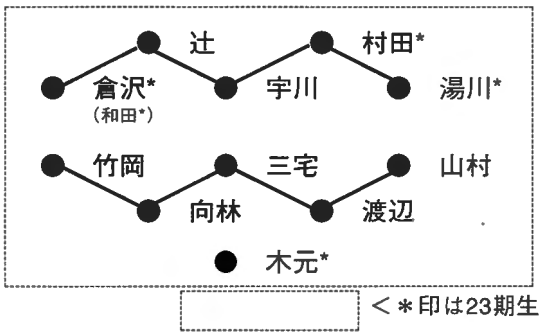
佃先生の先見性

昭和30年代のサッカーは、いわゆる「WMフォーメーション」が主流で、我々が中学生の頃はまさしくこのフォーメーションで戦っていた。それでも我々の個人技が優れていたこともあって結構良い成績が残せました。事実、中２、中３の時は宿敵であった本山中学（俗称、ポンチュウ）と神戸市の大会で常に優勝を争っていたし、京阪神三都市対抗の神戸代表として出場したりもしていました。

しかし、いかんせん練習時間が極端に短く（１日２時間×週２回＋土曜日は自由参加）、いかに密度の濃い練習をしたとしても、高校ではトップクラスには追いつけず、佃先生も作戦面で活路を見出そうと相当苦労されたと思います。そこで佃先生が考案されたのが「MWフォーメーション（通称、２トップシステム）」であり、これが大きな威力を発揮することになりました。いざ試合が始まると相手のセンターバックが、「おい、六甲にはセンターフォワードが２人もいる！　どうなってるんや」と戸惑いをみせ、おろおろしている間に勝ち進んでいったのが昨日のように思い出されます。

下の図にその当時のメンバー構成を示すが、このフォーメーションは早い話が現在の４－２－４システムである。宇川と三宅が中盤を支配し、そこからトップの２人や両ウイングに配球して攻撃にバラエティを持たせるものでした。また、ウイングによる守備とサイドバックによる攻撃を積極的に行うものであり、当時としては画期的な全員攻撃・全員守備を既に実行していたのです。ここに佃先生の先見性と独創性を見ることができると思います。

［宇川　裕］



＜＊印は23期生＞

残念だったこと

唯一残念だったのは、昭和39年の国体予選（東京オリンピックの年だったために４～５月に繰り上げられた）であと一歩のところで兵庫代表になり損ねたことです。

前述の「MWフォーメーション」をひっさげて順調に勝ち進み、準決勝で無名の福崎高校と長田高校グラウンドで対戦しました。皆の頭の中には決勝で当たるであろう関学のことで一杯で、目の前の相手のことをすっかり忘れ、足元をすくわれた（１対２で逆転負け）という苦い想い出があります。

佃先生は関学の試合を偵察に行っておられ、福崎戦は見ておられませんでしたが、翌日こっぴどく叱られたのはいうまでもありません。

何事も一つ一つ足元を見つめ、着実に進んでゆくことの重要さをひしひしと感じさせられたものでした。

［宇川　裕］

今おもうこと

今思えば、六甲での想い出は六甲サッカー部での想い出に凝縮されていると思います。楽しかったこと、苦しかったことなどがいろいろと思い出されますが、今となっては全てが楽しい想い出・貴重な財産となっています。

佃先生との出会い、諸先輩・後輩諸氏との出会い、それに我々６名の出会いもありました。それぞれが素晴らしい出会いでした。

６年間のサッカー部生活の中から多くの教訓も学びとることができました。これらは今も私の中に生きていますし、これからの人生においても大切にしていきたいと思います。

［三宅　譲治］

22期生の近況

宇川 裕 キャプテン

六甲卒業後も阪大サッカー部でセンターフォワードとしとプレーしたが、社会人になってからは体力が徐々に低下したため、最近では年に１、２回大学のＯＢ戦でプレーするだけ。５、６年前までは地元の小学生をコーチし、神奈川県の有力チームに育てた。現在、エッソ石油㈱に勤務。週末は専らゴルフ、テニス、釣りに明け暮れている。

辻　禮治

岩谷産業㈱東京本社に勤務。妻、息子、娘の４人で千葉に住まいを構え８年目。入社後16年間自ら当社にサッカー部を設立、西宮社会人リーグで楽しくプレーした事が今は懐かしい思い出です。現在は週１回のアスレチックジム通いで体力の衰え防止とゴルフのスコアアップに精進しています。

三宅　譲治

阪大でも宇川と一緒にプレー。社会人になって豊田市民リーグで約10年間プレーしたのち引退。現在、トヨタ自動車㈱に勤務。２年前より宇川と仕事での付き合いあり。因縁深いものを感じる。妻と娘の３人家族。娘はこの４月にトヨタへ入社の予定。

山村　峯彦

楽しく誇れる思い出としては、中３のとき本山中学を連破して神戸市の全タイトルを取ったこと。悔しい思い出としては高３の国体予選の準決勝で敗れたこと（本文参照）である。22期の仲間が各人の持ち味で頑張ったこと、佃先生の若々しい熱血感あふれる指導が思い出されます。

向林 保

現在、阪急六甲駅前で土地家屋調査士事務所を開業中とのこと。

（幹事の怠慢お詫びします）